戦前日本における児童遊園の児童指導員に関する考察

―東京市公園課の組織に着目して―

A Study of Playground Director in Children's Playgrounds of Pre-War Japan: Focusing on the Organization of Park Division of Tokyo

吉田　早織
Saori YOSHIDA

1．はじめに

本稿は、戦前期の児童遊園における児童指導員の位置づけを明らかにすることを目的としている。

幼児教育家として知られる倉橋惣三（1882-1955、明治15～昭和30）は、大正初期に「児童のために設けらるる社会的設備はすべて単純なる社会的意義のものではなくして、児童のあるところ必ず教育の意義を生ずるもの」と述べ、児童遊園および児童指導員の必要性を説いた[1]。また児童指導員は、子どもの遊戯や生活全般にわたって理解している専門家であることを求め[2]、学校でも家庭でもない子どもの校外生活の場で子どもを受け入れることが大切だと述べた[3]。

本稿で取り上げる東京市公園課は1921（大正10）年に創設[4]された。1923（大正12）年に発生した関東大震災後に倉橋惣三らが児童遊園や児童指導の重要性について世論の喚起に努めると、それを契機に翌年には東京市公園課の高級嘱託として末田ますが招かれ、日比谷公園児童遊園で児童指導の職務にあたった。さらに1925（大正14）年12月には、東京市公園課長の井下清と林学博士の上原敬二が中心となって、社団法人日本児童遊園協会を設立。この協会は、実質的には東京市公園課の外郭団体であり、事務は公園課でとっていたという[5]。そして1940（昭和15）年、東京市公園課にひとつの掛として公園児童掛が置かれ、初代公園児童掛長に技師の相川要一が、以下31名の掛員がその運営に携わったのである[6]。

児童遊園の児童指導については、末田ます（1886-1953、明治19～昭和28）が1942（昭和17）年に発刊した著書『児童公園』に当時の状況を克明に記録している。野尻（2003）は末田の著書をもとに、児童公園がどのように運営されていたのか、当時の社会状況とどのような関連がみられるのかを明らかにした[7]。また、進士（1984, 2011）は日比谷公園児童遊園の歴史を概観しながら、末田について詳述する[8,9]。この『児童公園』は、末田がどのような経緯で児童遊戯指導を行うことになったのか、当時の背景や末田自身の感情とともに記録され、日比谷公園児童遊園の運営が軌道に乗っ

ていく様子が手に取るように分かり資料性の高い文献である。しかし戦前の児童遊園における児童指導員についての先行研究のほとんどが、末田の論稿で語られてきたことも否めない。

そこで本稿では、戦前期の児童遊園における児童指導員の活動や役割を、日本児童遊園協会が発刊した機関誌『児童生活』の論稿から明らかにしたい。そのためにまず、全国に先駆けて公園児童指導員を置いた東京市公園課の組織の変遷等を、「東京市職員録」を手がかりに精査する。

なお、引用に際しては旧字および旧仮名遣いを現代仮名遣いに修正して表記した。また、年号表記は時代理解のため、本文上では「西暦（和暦）」を記載した。

２．東京市公園課の組織とその変遷

まず、東京市公園課の組織の変遷をみていきたい。東京市に公園課が設けられたのは1921（大正10）年である。江馬建が初代の公園課長で、1923（大正12）年からは技師の井下清が課長となった。図1は、我が国に現存する「東京市職員録」をもとに、公園課内の掛および掛長を時系列に整理したものである。

公園課は、大きくは管理系部門と技術系部門に分けられる。造園の根本である技術系部門は1933（昭和8）年まで技術掛として続き、その後は技術掛長の市川政司が工営掛長に、計画掛には東半七郎が計画掛長として安定的に続いていた。一方、管理系部門は短期間で掛や掛長が変わっている。1937（昭和12）に出張所が設けられると、技師や技手を中心に所長となり、公園課内の異動が盛んとなった。そして着目すべきは、1940（昭和15）年の「公園児童掛」である。東京市公園課の森春雄は、

> 風薫る五月十三日、東京市の公園課に公園児童掛が新設せられた。公園に児童掛を設けることは、誠に待望久しきものであって、輝かしき紀元二千六百年の年に当り、この掛の設けられたことは児童の為に、誠に慶びに堪えない次第である。[10]

と、公園児童掛の新設から2ヶ月半後に発行された『児童生活』で、その喜びを綴った。しかし、公園児童掛の初代掛長の相川要一は1年のみであったし、掛そのものも2年足らずで終わってしまった。1942（昭和17）年には「健民局公園部」として、管理課および各出張所で公園指導員が活躍していたが、翌1943（昭和18）年には部署名が公園緑地課に変わり、公園指導員の職員の多くが職員録には掲載されていなかった。

つぎに「東京市職員録」で人員配置について考えてみたい。1939（昭和14）年の職員録をみると、公園児童掛がまだ設置されていないというだけで1940（昭和15）年と大きな違いはなかった。また、1939（昭和14）年から吏員の種別に「公園指導員」が入り、雇員、とりわけ「指導手」も職員録に記載されたため、公園課の具体的な組織がつかめるものと期待する。（図2）

職員録に掲載されていた「公園指導員」は10名、「指導手」は17名だった。そのうち、出張所に

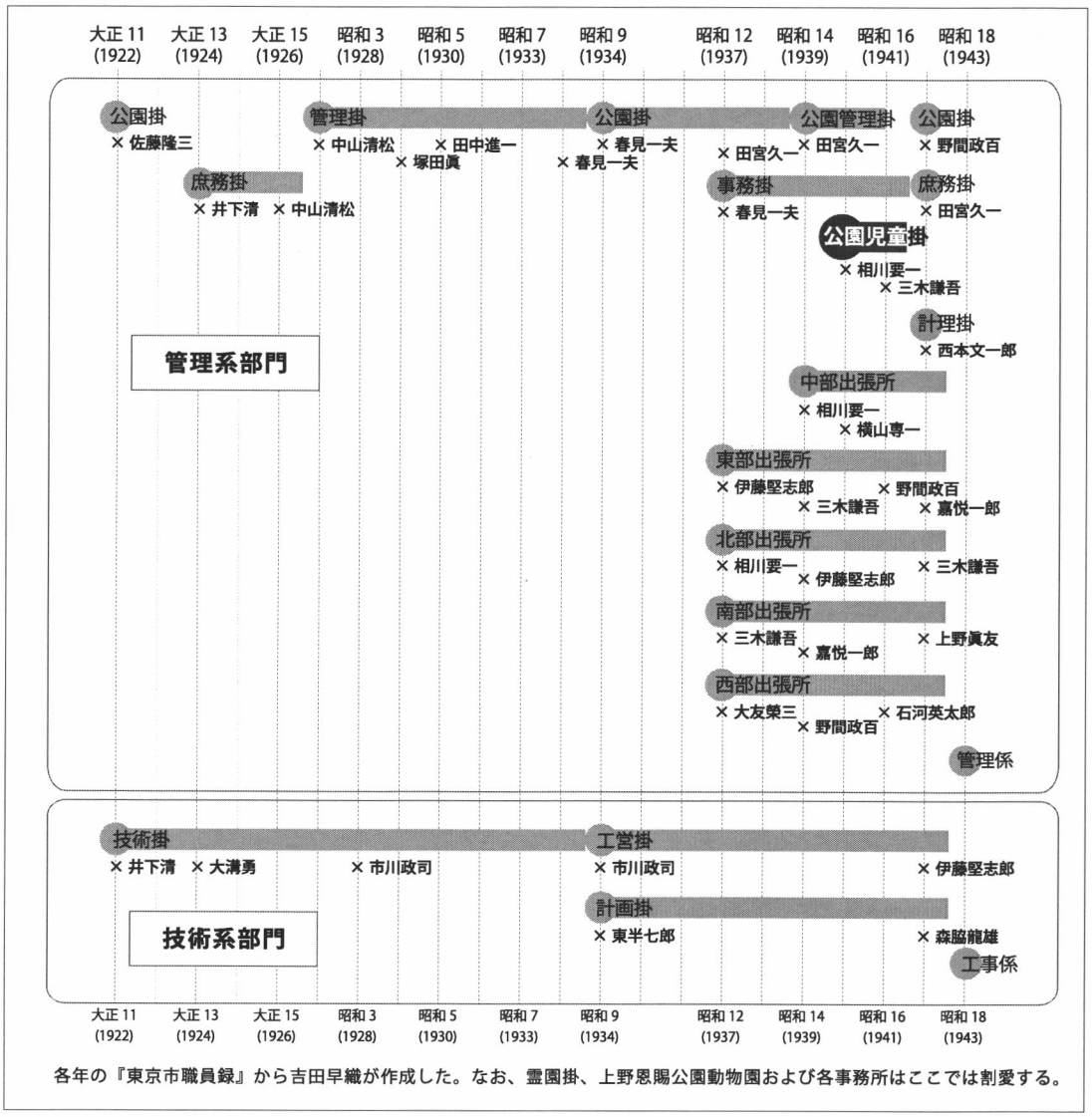

図1　東京市公園課の組織および掛長の変遷

所属する「公園指導員」は8名、「指導手」は12名である。職員録に記載されている吏員および雇員の種類には「監視」や「管理員」があり、機関誌『児童生活』に「公園指導員」として紹介されている人物がこれらの種類に属している場合もある。

しかし、1940（昭和15）年には児童指導員で『児童生活』の編集を担当していた内田二郎の名前が、公園児童掛長をつとめた相川要一は1941（昭和16）年に、それぞれ公園課から消えている。1941（昭和16）年の公園児童掛長は三木謙吾であり、翌年に公園児童掛がなくなると三木は北部出張所の所長となっていた。相川は公園課の別掛に異動したのでもなければ、他部署にもその名は見当たらなかった。内田は公園課からは名前がなくなったが、後に大田区で「はこぶね児童館」を運営し、日本児童遊園協会の解散まで見届けるなど、児童指導に携わり続けた。

ほかに有栖川宮記念公園で公園指導員をしていた竹下文康は、傷痍軍人に勉強を教えることになり1940（昭和15）年に公園課を去る。有栖川宮記念公園では竹下の送別子ども会を開き、竹下は以下のような挨拶をした。

> 皆さんのお顔を見ていると、毎日公園に来て先生と一緒に遊んだ方が沢山いらっしゃいますね。（中略）先生は、皆さんと別れるのが淋しくて淋しくて行こうか、止めようか、と何回も考えました。でも今迄、皆さんと面白く遊んだのも又、兵隊さんと一緒に御勉強するのも、皆お国の為に尽す御奉公ですね、それで先生は、皆さんとお別れするのは、淋しいのですが、喜んでお国の為に働くつもりです。[11]

竹下のように送別子ども会が開催され、『児童生活』の誌上に掲載されるのは珍しい。折しも公園課に公園児童掛ができた年のことである。日々子どもたちと関わってきた指導員として、指導員をやめることへの葛藤が挨拶からも感じられ、徐々に公園児童指導の世界にも戦争の影が近づいてきたことをうかがわせた。

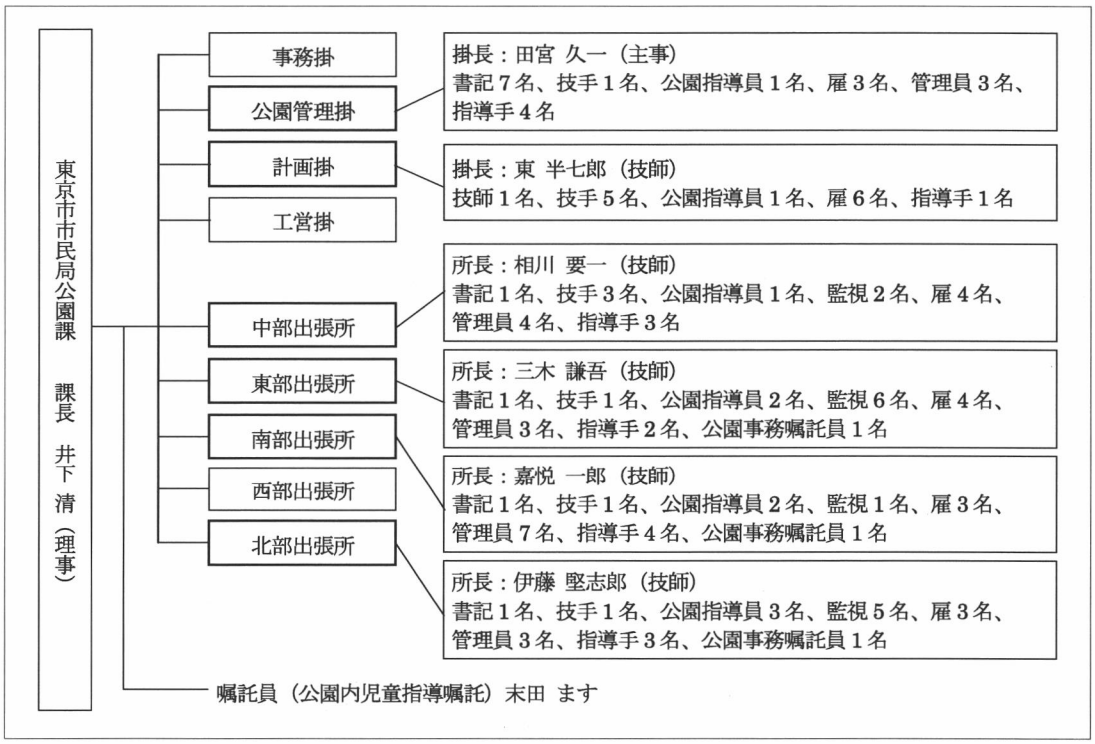

図2　昭和14年の東京市市民局公園課の組織
（東京市職員録をもとに筆者作成。指導員および指導手が含まれる部分を抜粋し、動物園・霊園等は割愛した。）

3．東京市公園課の児童指導員

1934（昭和9）年から東京市公園課は全国に先駆けて公園児童指導員を置き、その翌年には相互の親睦と研究を図る目的で、公園課長の井下清を顧問として指導員会を結成した[12]。結成時の会員は、内田二郎、大藤勇平、金子九郎、末田ます、鈴木長生、長屋好枝、竹下文康、松本彌作、増山他計男、そして三原利子の10名であった。毎月第3水曜日の正午に日比谷公園に集合し、理論や実地、あるいは運動具設備の改良の研究や児童指導の企画の研究などを行ったとされる[13]。そして先述のとおり1940（昭和15）年、東京市公園課にひとつの掛として公園児童掛が置かれた。本章では児童遊園史の基礎的資料として、東京市公園課にどのような掛員が関わっていたのかを整理してみたい。

日本児童遊園協会が刊行した機関誌『児童生活』は、児童遊園という切り口で研究者、実践者、行政関係者、教育関係者などがさまざまな視点から論じており、戦前の児童遊園を知るうえで貴重な資料であるといえる。当時の児童指導員も寄稿しており、その人物がどのような専門分野で児童指導を行ってきたかという手がかりにもなる。しかし、我が国において『児童生活』が所蔵されている図書館は全国で7館しかなく、しかも図書館に所蔵されていない巻号もあり、それらは我が国に残っていない可能性も高い[14]。

本稿では、現存する『児童生活』に掲載された著者を分析し、東京市公園課に関係する人物を抽出していく。対象とした『児童生活』は、1928（昭和3）年の第1巻から1941（昭和16）年の第10巻の計27号分である。抽出できた記事や論稿は417本あり、そのうち著者が明確な261本、116名を分析した。その結果、誌上で記事または論稿を出している東京市公園課の関係者（嘱託職員含む）は30名であった（表1）。

図3　井下清と児童指導員の一部
昭和10年、日比谷公園児童遊園で撮影
左から井下、今村、末田、長屋、内田、竹下の順
（出典：『児童生活』第4巻第4号, p.3）

表1　『児童生活』に掲載された東京市公園課職員

氏　名	種　別	記事数	備　考（所属や参考事項）
井下清	技師→理事	33	ペンネーム「きよし」「花守人」含む
相川要一	技師	3	S4「東京市技手」
市川政司	技師	2	S11「東京市技師」
嘉悦一郎	技師	2	S10「市の技手で保健局公園課勤務」
東半七郎	技師	1	
三木謙吾	技師	1	S10「東京市日比谷公園の主任」
古賀忠道	技師	3	S10「上野恩賜公園動物園園長」
森脇龍雄	技師	1	
唐戸作治	技手	9	S14「東京市公園課 日比谷公園園芸主任」
木村四郎	技手	1	S12「井之頭恩賜公園動物園」
平田理	技手	1	
増山他計男	技手	1	S10「市保健局公園課に勤務」
内田二郎	公園指導員	3	S10「公園の児童指導員、おもに上野恩賜公園児童遊園勤務」
大藤勇平	公園指導員	3	S12「東京市東部方面公園担任の公園児童指導員」
金子九郎	公園指導員	3	
吉田定輔	監視	1	S12「東京市保健局公園課勤務」
竹下文康	管理員	5	
田島此助	管理員	1	S12「日比谷児童遊園」
今村ミナ	指導手	2	新姓：藤田ミナ子
谷口和子	指導手	2	S16「東京市公園課員」旧姓：田家
長屋好枝	指導手	2	S12「日比谷公園勤務　公園児童指導員」
福岡敏子	指導手	1	
隅田勝美	(指導員)	2	S12「上野児童遊園」S16に「平野勝美」
萩原良枝	(指導員)	3	S14「東京市公園課勤務」
本間雪子	(指導員)	6	S11「東京市公園課勤務」
中村禮子	(指導員)	2	S12「日比谷公園勤務　公園児童指導員」
三原利子	(指導員)	5	S11「公園課の指導員」
村松呉山人	(技手？)	5	S11「東京市公園課勤務」
田中正子	(指導員)	1	S12「日比谷児童遊園」
末田ます	公園内児童指導嘱託	11	S10「日比谷公園児童遊園、市の嘱託」

「種別」は「東京市職員録」の吏員種別を確認して記した。職員録には記載されていないが『児童生活』の誌上で「東京市公園課」や「公園指導員」等と紹介されている人物には、便宜上（指導員）としておいた。「記事数」は、記事や論稿の内容やボリュームに相当の偏りは見られるが、1タイトル1本とした。

記事の内容は、技師や技手は遊具や設備、海外の児童遊園に関する情報等がよく見られた。技手の唐戸作治は日比谷公園の園芸主任であり、季節の植物の育て方など、論稿のほとんどは植物に関するものであった。本間雪子は羽根つき競技に関連して、バドミントンの研究を連載した。また谷口和子は公園子ども会での音楽指導の難しさや楽しさについて掲載していた。その他の現場の指導

員も、遊び方の紹介や児童指導をするうえで気付いたこと、公園子ども会などに関してなどであった。

つぎに、1939（昭和14）年と1942（昭和17）年の「東京市職員録」から、公園指導員と指導手、その他『児童生活』に掲載された著者（掛長および所長をのぞく）を抽出した。なお、公園指導員等がおかれていない西部出張所および墓地、動物園等はここでは割愛する。

表2　昭和14年の指導員

掛・出張所名	種　別	氏　　名
公園管理掛	公園指導員	佐藤保雄
	指導手	福岡敏子、宗石博信、松崎卯一、谷口和子
計画掛	公園指導員	前島康彦
	指導手	田中潔
中部出張所（日比谷公園内）	技手	唐戸作治
	公園指導員	内田二郎
	指導手	松平慶雄、瀬尾為子、今村ミナ子
東部出張所（清澄公園内）	公園指導員	近藤利三郎、大藤勇平
	指導手	稲垣ミエ、松原八千代
南部出張所（芝公園内）	公園指導員	松本弥作、久保田幸男
	管理員	竹下文康、鈴木長生、田島此助
	指導手	中川徳治、藤野克裕、長屋好枝、瀬野フジノ
北部出張所（上野公園内）	公園指導員	富岡丘蔵、樋村忠利、金子九郎
	指導手	小島令考、中堀文子、鈴木とよ

（「東京市職員録」より筆者作成）

表3　昭和17年の指導員

掛・出張所名	種　別	氏　　名
管理課	書記	森春雄
	公園指導員	松本弥作、佐藤保雄、前島康彦、松崎卯一、福岡敏子、谷口和子
中部出張所	公園指導員	大藤勇平、松平慶雄
東部出張所	公園指導員	近藤利三郎
	監視	鈴木長生
北部出張所	監視	田島此助

（「東京市職員録」より筆者作成）

表2、表3を比較すると、公園児童掛の創設前後のわずか3年の間に公園指導員の配置が変化し、大幅に児童指導に携わる職員が減少したことが分かる。その理由は、1939（昭和14）年に記載されていた「管理員」や「指導手」が1942（昭和17）年の職員録に掲載されなくなったためで、実際に指導員としてはそれほど人数が減ってはいないものと思われる。

それでは、公園指導員は東京市の職員としてどのような立場だったのだろうか。そもそも東京市の吏員種別に「公園指導員」ができたのは1939（昭和14）年であり、1942（昭和17）年の職員録まで確認できた。表2や表3に記されていた公園指導員等のほとんどは、1943（昭和18）年の職員録にその名前は記されていなかった。吏員種別に「公園指導員」はなくなり、唯一残っていた佐藤保雄、松本弥作、前島康彦、松崎卯一、福岡敏子の5名は「技手」に属していた。召集や徴用などが強化され、1943（昭和18）年の職員録には「入営中」「応召中」「応徴中」などの文字が氏名の隣に並んでいた。

吏員には年棒者と月棒者があり、雇員は表4に記載された名称を以って採用され、日給である。その種別は表4のとおりである。たとえば井下清は技師から理事に昇格したがいずれも年棒であったし、1927（昭和2）年に横浜YMCAから東京市に入り児童指導員となった[15]内田二郎は、1936（昭和11）年の職員録で「監視」として名前が掲載されるまではおそらく雇員であったと思われる。

表4　東京市有給吏員および雇員の種別

吏員	年棒	市長	市参与	助役	収入役	副収入役	区長
		局長	**理事**	**主事**	**技師**	視学	講師
	月棒	**書記**	統計書記	収納書記	税務書記	戸籍書記	社会書記
		技手	医員	調薬員	教諭	授業員	商業指導員
		公園指導員	船長	機関手	運輸監督	清掃監督	**監視**
		守衛長	質屋鑑定	看護婦長	助産婦長	保母長	保健指導婦
雇員	日給	臨時雇	**管理員**	保母	運転士	機関士	信号士
		車輌士	守衛	水衛	消毒手	防疫手	看護婦
		助産婦	看護人	運転助手	消防手	補導手	**指導手**
		訪問婦	保健婦	医員助手	臨時医員	臨時調薬員	

（昭和14年「東京市職員録」から筆者作成　※公園課に関連する種別は太字で囲み罫）

それでは、吏員でも雇員でもなく、「公園課高級常勤嘱託」として井下に招かれた末田ますはどのような位置づけだったのだろうか。末田ますは、カルフォルニア大学、コロンビア大学で学び、1917（大正6）年に卒業した。1923（大正12）年の帰国と同時にYWCAに入り、翌年、東京市公園課長であった井下清の要請で東京市公園課の高級嘱託となった。この「高級」という意味は、学識高い実践者であるだけでなく、報酬面についても「高い評価」を受けたのではないだろうか。表5の給料表を参考にしながら検証していきたい。

末田が井下に招かれた1938（大正13）年は年1000円であった。これは「技手 六下」とほぼ同じ金額である。その後、2年から3年ごとに金額があがり、1940（昭和15）年には年1500円、つまり「技師」クラスに、1942（昭和17）年には年1800円までにあがっていった。

1926（大正15）年の井下清の棒級は「技師 八上」で基本的に年2400円が、その10年後の1936（昭和11）年は「技師 五上」で年4500円、1942（昭和17）年には「理事 二」にまで上がり、年7000円が支給されていた。月棒者については、たとえば内田二郎は1936（昭和11）年に「監視 七下」で月70円（つまり年間で840円）であったし、同年の松本弥作は「監視」で月83円だった。ちなみに

1942（昭和17）年の松本は「公園指導員 五下」で月110円（年間1320円）となっていた。

給料表に掲載されていない雇員に対しては、日給で月額100円以下と規定されている。ただし月100円を支給された在職2年以上の成績優良者は20円までの加給や、勤続6ヶ月以上の者は月額で支給する等の措置があった。

表5　東京市有給吏員給料額（昭和9年～昭和17年　単位：円）

等級／種別		一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級
年棒	区長	五〇〇〇	四五〇〇	四〇〇〇	三六〇〇	三三〇〇	三〇〇〇	二七〇〇	二四〇〇	二二〇〇	二〇〇〇
	局長	**一〇〇〇〇**	**八〇〇〇**	**七〇〇〇**	**六〇〇〇**	**五〇〇〇**					
	理事	**八〇〇〇**	**七〇〇〇**	**六〇〇〇**	**五〇〇〇**	**四〇〇〇**					
	主事 視学 講師	五〇〇〇	四五〇〇	四〇〇〇	三六〇〇	三三〇〇	三〇〇〇	二七〇〇	上 二四〇〇 下 二二〇〇	上 二〇〇〇 下 一八〇〇	上 一六〇〇 下 一四〇〇
	技師	**八〇〇〇**	**七〇〇〇**	**六〇〇〇**	**五〇〇〇**	上 四五〇〇 下 四〇〇〇	上 三六〇〇 下 三三〇〇	上 三〇〇〇 下 二七〇〇	上 二四〇〇 下 二二〇〇	上 二〇〇〇 下 一八〇〇	上 一六〇〇 下 一四〇〇
月棒		二〇〇	一八〇	一六五	上 一五〇 下 一三五	上 一二〇 下 一一〇	上 一〇〇 下 九〇	上 八〇 下 七〇	上 六〇 下 五〇	上 四五 下 四〇	上 三五 下 三〇

（太字は昭和8年以前からの変更箇所）

1936（昭和11）年以降は公園課の人件費をも公園独自経済でまかなうようになったという。それ以前から、公園課は井下清の優れた経営手腕によって豊かな公園財政であった。人件費も公園課でまかなうことになってからは、公園等の所管事業構想が他より多くの束縛を受けることなく、井下の構想が自由に実現し得る体制がとれるようになった。1935（昭和10）年を境に、多くの官公私大学卒業生を毎年採用することができたのも、この経済のおかげであった[16]と前島は述べる。末田ますが安定的に児童指導事業に携わることができたのは、井下が末田に対し児童指導の専門職として評価し、報酬面をもきちんと保障していたということが明らかとなった。

４．児童指導員の活動と内容

つぎに東京市公園課の児童指導員について、その活動と内容をみていきたい。

昭和初期の東京市においては、日比谷公園や上野恩賜公園等の大規模な公園内に児童遊園が設けられた特設児童遊園での活動と、地域のなかにある小規模の児童遊園を巡回する活動が行われてきた。特設児童遊園においては、午前中は準備や打ち合わせ、各種研究等を、午後は主として遊戯競技や音楽、手工などの指導にあたった。特設児童遊園では毎週1回実施された「定期児童会」、日本古来の年中行事を伝える「年中行事児童会」、公園開園記念等に催される「特別児童会」などがある。これらの行事の計画立案や講師手配ほか、さまざまな準備があり、さらには午前中の幼児指導や日常の児童指導があったため、児童指導員は多忙だった[17]。また、夏休みは児童指導員を総動員させ、子どもたちの夏休み期間の遊戯指導を強化していた[18]。

表6　昭和12年の日比谷公園児童遊園（夏休み中毎日）のプログラム

午前10時頃	童話
午前11時頃	遊びの指導
1日中随時	読書（適当な本を提供し貸し出す）
同	図書の指導
午後3時頃	手工の指導
10時、正午、3時より約1時間	レコードコンサート

（『児童生活』第6巻第5号, p.9より抜粋して作成）

小規模の児童遊園の巡回指導では、巡回子ども会を開催した。上野公園内にあった北部支部によると、北部支部だけで年間200回の子ども会を開催し、参加児童数は延べ8万人（上野児童遊園の利用児童は年間40万人）にのぼったという[19]。巡回子ども会は、平日の放課後にビラで子どもたちを集めて行われ、いろいろな話しを聞かせたり、童話や紙芝居を与えたり、みんなで一緒に歌や遊びをした。参加する子どもは小学3、4年生を中心に、200～600名くらいが集まっていたという[20]。厚生省体力局（1940）[21]によると、巡回子ども会の具体的な内容は次のとおりである。

1. 公園児童会の歌（一同）
2. 公園愛護の話（指導員）
3. 東京市歌（一同）
4. 童話（児童有志）
5. 童話（指導員または講師）
6. 絵童話または人形芝居（指導員または講師）
7. 愛国行進曲（一同）
8. 遊戯および団体ゲーム（一同）
9. 閉会の辞（指導員）

末田は子ども会の指導において一番難しいところは、会場が屋外のため落ち着いた雰囲気にまとめて進行するという管理の問題であるという。面白そうだと遠くで遊んでいた子どもが走ってくるが、飽きるとすぐに立ってしまう。そこで終始子どもが行き来せずに参加させる方法として、ゴザを敷いて子どもたちを座らせ、指導員が少し高い位置に立って話したり、上級生に場内整理をさせることで、落ち着いた子ども会ができるようになった[22]。また、子ども会の進行は活発でなければならないとも述べる。短時間に充実した内容を計画し、その内容も特に凝ったものではなく普通のもの、素朴で良いから力強いもの、子どもたちを驚かすのではなく親しみやすいものにまとめていくのが良い。

音楽指導を担当していた谷口和子も、公園でさまざまな年齢の、しかも多いときは700～800人の子どもたちに歌を指導する難しさを感じていた。しかし、子どもたちが公園で、みんなで歌を歌うことは楽しくて愉快で自由であることを基本に指導を心がけており、これらの指導によって、その後の子ども会がスムーズに運ばれるとも述べている[23]。

指導員の人数は、来会の児童数が150名くらいの小規模の子ども会では、主任1名に助手2名が、数千人が来園する非常に利用者の多い児童遊園では、4名以上の指導員が必要であると末田は指摘する[24]。また子ども会の目的は、市民教育の基礎を与えるものであると厚生省体力局はいう。その内容には、市政に関するものや郷土史的なもの、科学的、伝統的、童話的なもの、あるいは実生活に即した創造的、自然的、生産的、集団生活的、全体主義的なものへとの指導性を持った、そして健康的かつ芸術的な価値のあるものを選ぼうと努力しているのであった[25]。

5．児童指導員の役割

児童遊園は、すべての子どもが差別なく自由平等に利用できる空間ではあるが、それは明確な社会秩序があって初めて成立するといえよう。自由に使える空間だといって、ある子どもが他人の使っていた遊具を取り上げて遊び始めたり、遊具の順番待ちの列に割り込んで勝手に遊び始めるというような行動をすれば、ほかの子どもたちは不快感や不平等であると感じる。金子九郎も「いろいろな年齢の男の子や女の子、それらは家庭からいっても千差万別、町もちがえば学校もちがいます。そうした互に未知な子供達が集ってくる公園は、子供達の作っている一つの小さな社会とみることが出来るのではないでしょうか[26]」と、児童遊園が1つの小さな社会であると表現している。

井下清は「児童遊園は先ず人である」と主張する[27]。年齢や立場が千差万別で、児童遊園に不特定に来園する子どもたちを指導することは、幼稚園や小学校よりもさらに困難なものであるが、児童指導員の活躍なくしては児童遊園が有害無益であると言われてしまいかねないと述べる[28]。一方で、児童指導員の指導方法についても以下のように言及する。

> 子供の天性が持って居るところの努力性と協調性を誤った指導をして為めに傷けて将来善き社会人たる素質を破壊するようなことはあってはならない。あの何物をも貫くような溌剌とし

た子供の遊び心を誤った児童指導者の手に依って猫のような子供にしているようなことはあるまいか。子供は決して指導員の為めに生れ出たものではないが動もすれば充分伸びる芽を曲げられたり、摘まれたり、折られたりすることはないだろうか。[29]

このように、子どもたちがただ遊んでいる（たとえ失敗やいたずらがあったとしても）のを、大人の視点で統制を図ろうとしすぎると、児童指導員が自身の都合の良いようにコントロールすることになりかねない。末田は子どもを正しく指導する心構えとして、「子どもの裡にある創造性を充分飲みこんでいること」「子どもの性質をよく知ること」「子どもは遊びが生活の全部であること」を挙げている[30]。また、児童指導員について、「小学校の教師でもなく造園家でもなくまた体操の先生でもなく社会事業家でもありません。一言、ただ児童が好きで健康で音楽、造園、遊にいえば戯、手工などの心得があり、童話等も上手で心から、奉仕的に保導に当る人ならばよいのであります[31]」と述べ、児童遊園の指導員は特殊な仕事であることが分かる。つまり、児童遊園という子どもたちの小さな1つの社会において、子どもたちの特性を知り、全身で受け止められる児童指導員が存在することで、将来を担う子どもたちへの社会教育を行っているといえるのではないだろうか。

末田ますは、児童指導には大きくは「自由遊戯」と「団体的遊戯」の2つの体系があるという。自由遊戯の指導は、さまざまな遊具の使い方の指導することが主なことであるが、大切なことは、皆で仲良く使って楽しく遊ぶという態度を習慣づけることであり、公共物として認識させることである。そこに、「実地に即した修身教育」があると考えている。また、団体的遊戯指導とは「訓練指導」のことである。子どもはひとりではなく大勢集って遊びたがる。大勢集まるところに遊び方法も工夫できるし、ゲームも出来ることとなる。子どもたちは訓練されるつもりで遊びに来たわけではないが、結果として団体遊戯になる[32]。

一方、金子九郎は児童指導の心すべき点として2つの側面から説いた。ひとつは公園の側面であり、もうひとつは児童の側面である。まず公園の側面に対して、金子は「公平性」を徹底的に貫いた。たとえば、いかなる場合や意味においても、ある特定の児童を作ってはならないとし、公園では一切子どもの名を呼ばず、「君」「あなた」でとおした。子どもたちが親しくなって指導員に取り巻き、指導員もそれらの子どもにより多くの関心を示すようになると、他の子どもたちはせっかく公園に遊びに来ながら、その光景を羨ましく感じたり、さびしく思ったりして徐々に公園から離れていくというのである。つぎに「児童の側面」について、児童指導は本当の意味の実践的教育であるという。子どもたちは、家庭や学校、環境だけでなく、性別や年齢、性格にいたるまで異なっている。子どもたちが雑然と、しかも大量に集まる公園において、ひとりの人間として解放された子どもたちに対し、既成の概念や指導理論ではなく、「公園の全児童をひとりの除け者もなく指導する」ということで、単なる訓練ではなく実践的教育が可能となると述べている[33]。

森春雄は児童指導員ではなく事務方であったが、学校と児童遊園における子どもの気持ちの違いを以下のように指摘する。

子供は学校に居る間は、非常に、おとなしく先生の言うことを聞くものである。しかし、そ

の気持は、かなり窮屈なものになっていることは、誰人も否めない。公園は子供の楽園である。ここには解放された、のびのびした気持のみがある。学校での先生の話しの聴き手の心理には教えられている気持が支配して居り、公園でのお話しは、同じ話でも楽しんで聞いているのである。[34]

気持ちが解放されて児童遊園に遊びに来る子どもたちが勉強と感ぜずに教育されていく、まさに実践的教育が児童遊園にはある。しかしそれには指導員の存在は不可欠であるといえよう。

6．おわりに

本稿では、戦前期における児童遊園の児童指導員の活動や役割について、日本児童遊園協会が昭和に入って発行した機関誌『児童生活』（第1巻～第10巻のうち収集可能だったもの）の論稿から明らかにしようとした。

まず、児童指導員の中核ともいうべき東京市公園課の組織の変遷について、「東京市職員録」（大正10年～昭和18年）を手がかりに精査した。その結果、1940（昭和15）年に新設された「公園児童掛」は、1939（昭和14）年にはその原形ができていたが、1941（昭和16）年までの2年間のみの組織だったことが明らかになった。また、公園指導員、指導手など、児童指導員のなかにも種別があったことも分かった。

つぎに東京市公園課の児童指導員について、活動と内容、役割等について『児童生活』から考察した。児童指導員は年間を通じて多忙であり、子ども会等ではいかに子どもが楽しく集中して参加できるか、さまざまな立場から試行錯誤している面がみられた。子どもにとって児童指導員のいる児童遊園は、社会生活の場のひとつであり、子どもたちが遊びを通じて教育される「実践的教育」がそこに存在することが確認できた。

以上のことから、戦前期における児童遊園の児童指導員については、東京市公園課長の井下清が末田ますを高級常勤嘱託として要請するなど、重要な役割を果たしたことがあらためて明らかになった。しかし、公園課以外に東京市社会局や民間等でも、児童遊園における児童指導員が活動していたという記録もある。今後は、東京市公園課との関連性も含め、個々の児童指導員について探究し、児童遊園における児童指導員の全体像を明らかにしていきたい。

1　吉田早織（2013）「倉橋惣三と児童遊園との関わりに関する考察」『教育研究』第57号，青山学院大学教育学会，pp.107-120

2　倉橋惣三（1915）「都市児童遊園の施設に就て」『児童研究』第18巻第9号，pp.312-313

3　倉橋惣三（1928）「児童の校外生活」『児童生活』第1巻第1号，p.2

4　内田二郎等編（1958）「東京都における児童遊園等に関する沿革年表」『都市公園』第12号，p.6

5　前島康彦（1974）『井下清先生業績録』，p.269

[6] 末田ます（1942）『児童公園』清水書房，p.119

[7] 野尻裕子（2003）「昭和初期の児童公園と社会背景に関する一考察 ―末田ますの『児童公園』にみる指導者の役割を中心に」『日本保育学会大会発表論文集』（56），日本保育学会，pp.464-465

[8] 進士五十八（1984）「日比谷児童遊園生活史」『月刊レクリエーション』日本レクリエーション協会，pp.15-22

[9] 進士五十八（2011）『日比谷公園 ―100年の矜持に学ぶ』鹿島出版会，pp.108-119，191-194

[10] 森春雄（1940）「公園に於ける指導」『児童生活』第9巻第3号，pp.13-15

[11] 日本児童遊園協会（1940）『児童生活』第9巻第3号，p.17

[12] 日本児童遊園協会（1935）『児童生活』第4巻第3号，p.31

[13] 日本児童遊園協会（1935），前掲書，pp.31-32

[14] 吉田早織（2015）「昭和初期における日本児童遊園協会の歴史と事業」『都市公園』東京都公園協会，第211号，pp.54-57

[15] 前島（1974），前掲書，p.269

[16] 前島（1974），前掲書，pp.136-137

[17] 金子九郎（1940）「公園に於ける児童指導に就て」『造園雑誌』日本造園学会，第7巻第2号，p.94

[18] 日本児童遊園協会（1937）「公園はコドモの天国」『児童生活』第6巻第5号，p.9

[19] 金子（1940），前掲書，p.94

[20] 金子（1940），前掲書，p.93

[21] 厚生省体力局（1940）『児童公園』体力向上施設参考資料 第6号，pp.37-38

[22] 末田（1942），前掲書，p.80-81

[23] 谷口和子（1941）「公園の子供と歌」『児童生活』日本児童遊園協会，第10巻第1号，pp.12-13

[24] 末田ます（1937）「児童公園と保導問題」『児童生活』第6巻第4号，p.11

[25] 厚生省体力局（1940），前掲書，p.39

[26] 金子九郎（1937）「公園での子供の世界」『児童生活』第6巻第2号，p.8

[27] 井下清（1935b）「児童遊園を作るもの丶祈り」『児童生活』第4巻第4号，p.4

[28] 井下清（1935a）「甘からず辛からず」『児童生活』第4巻第1号，pp.2-3

[29] 井下（1935b），前掲書，p.2

[30] 末田ます（1940）「冬の子供の遊ばせ方」『児童生活』第9巻第1号，p.9

[31] 末田（1937），前掲書，p.10

[32] 末田（1942），前掲書，p.27

[33] 金子（1940），前掲書，pp.94-98

[34] 森（1940），前掲書，p.14